

京都から見た日本の歴史（63・5・28）

上横手雅敬（S25文乙）

一 はじめに

三高は明治二年（一八六九）に大阪で、その前身である舎密局が開かれて以来、今年（昭和六十三年）で一二〇年を迎えました。また私は、別の意味でも今年は記念すべき年だと考えています。すなわち三高が大阪から京都に移ってまいりましたのは明治二十二年で、それから数えますと、本年はちょうど一〇〇年になるのであります。

三高が京都に移るについては、地元の熱心な誘致運動がありまして、新築費一六万円余のうち一〇万円を京都府が負担し、また数万の市民が新しく出来た三高の校内を見学したと聞いております。それ以来、三高は地元の非常な厚意に支えられてきました。京都は学者や学生を大切にされる土地柄でありまして、京大や三高と市民との間の独特の親密さは、この町の一つの特色だと

思います。こうした公開講演も、京都市民に対する謝恩の意味が含まれているのではないかと、考えるのであります。

三高が京都にまいりまして八年後には、それが誘い水となった形で京都大学が創設されました。三高の京都移転によって、京都が世界的な学都として発展していく基礎が築かれたのであります。また京大や三高の誇る自由の学風は、京都という反権力的な、自由な風土を背景にして作られてきたのでありまして、このように考えますと、京都と三高とは極めて緊密な関係にあると云わねばなりません。

今日は「京都から見た日本の歴史」という題でお話ししますが、京都に都が移されたのは西暦七九四年（延暦一三）で、これもやがて建都一二〇〇年が近づいています。しかし歴史的な意味から申しますと、あまり京都市という点にこだわるべきではなく、それより既に十年前に、長岡京に都が遷されているのが重要であります。

奈良に都が置かれていた時代には、山城国でも南山城が重要でありました。国府ははつきりしませんが、今の相楽郡山城町にあったようですし、国分寺は加茂町にありました。奈良に近い南山城が山城国の中心であり、「万葉集」に歌われておりますのも、大体宇治より南の方であります。北山城は、当時の政治の中心から外れていました。

ところが道鏡の登場に見られるような、仏教による政治の乱れを改め、律令体制を立て直すた

めに、七八四年に北山城の長岡に移って来たのであります。奈良から山城国へ移って来たことが大きな意義を持つのであって、長岡京から平安京へ移ったのは、小さな修正に過ぎないのであります。

「京都から見た日本の歴史」という今日のテーマですが、私はここで京都ナシヨナリズムの立場に立って、京都自慢をやるうとは思いません。京都はそんなケチな町ではないはずであります。そうではなくて、京都を中心に話して行けば、自然に日本の歴史になるし、それも従来とは多少趣の違った日本の歴史が可能ではないかと思うのであります。

二 畿内時代と坂東時代

そういう点から見ますと、日本の歴史は大きく云って、畿内時代と坂東時代に分かれると思えます。

畿内とは都の周辺であります。畿内は山城・大和・河内・和泉・摂津、すなわち奈良県、大阪府、それに京都府・兵庫県の一部を含む地域です。畿内の付近を合せて、今日の近畿地方という名称が作られました。次に坂東とは足柄・碓氷の坂より東、すなわちいまの関東地方のことです。畿内には奈良や京都、坂東には鎌倉や江戸が含まれます。この畿内時代と坂東時代の境になるのは、徳川家康が幕府を江戸に開いた時であります。それまでは畿内時代だと思えます。

私は、日本歴史の一番大きなエポックは、中世と近世の間にあると考えています。古代から続いてきた中国風の天皇制は、江戸時代の初めになると実質的に没落してしまっています。その基礎を成していた荘園制なども、中世の末には完全に崩壊します。明治になって、改めてヨーロッパ風、ドイツ風の天皇制が作られたのです。

江戸時代の皇室は三万石の大名だと云われますが、これは五代將軍綱吉以後のことで、二回にわたって幕府が増加させた結果であって、初めに家康から進められたのは僅か一万石でした。また幕府は朝廷や公家を統制するために、「禁中並公家諸法度」を定めましたが、その第一条には「天子御芸能のこと、第一御学問なり」とあります。天子は学問をしないさいとして、幕府によって天皇の社会的役割が定められたのです。それ以前の法律に、天皇のことを書いたものはありませんが、それが初めて法によって規定されたのです。しかも天皇自身が作った法律ではなく、徳川氏がつくった法律で規定されたということは、天皇制の没落を意味するものであります。

内藤湖南は応仁の乱で日本が大きく変わったといっています。具体的な例として、それまで名門を誇っていた家々が、この乱を契機として没落し、新しく出てきた大名は、下剋上によってはい上がってきた武士たちであり、そして彼らはずっと江戸時代以後まで続くことなどを指摘しています。

またお茶、お花、能など今日まで続いている伝統芸能、それに書院造りなどの日本的住宅様式、

これらはみな中世末に始まったのであります。中世と近世との間に横たわる時代の切れ目は、明治維新のそれよりも奥深いものがあります。

明治維新による変化は上面だけのものであって、庶民の生活だとか、意識とかは、江戸時代と明治時代との間では、それほど変わっておらず、むしろ大きな変わり目は、中世と近世との間にあったのであります。政治の中心が畿内から坂東へ移ったのも、その大きな変化の一側面でありました。

巖密に言えば、江戸開府の三年前のことですが、関ヶ原の合戦後、家康は後継者の秀忠に居城をどこにするかを尋ねました。これは坂東と畿内との選択だと思えます。当時の徳川氏の居城は江戸でしたが、家康が江戸に入ったのは、豊臣秀吉から関八州を与えられた結果でしたから、その秀吉との関係をここでいったん清算する必要がありました。そのまま江戸に居座るとしても、もう一度それを確認しておく必要があったのです。そして結局は江戸に留まることになりました。こういう東にするか、西にするかの決断がなされたのは、私の知るところでは、日本の歴史上、四回あるのですが、これは第三番目なのです。他の三つは後程申しますが、関ヶ原の合戦のあとで、坂東を基盤とし、江戸に居城を置き、さらにはそこに幕府を開くことによって、政治の中心が江戸と大坂の二つに分裂するのを避けようとしたのが、家康の決断だと思えます。

三 鎌倉時代をどう見るか

ところが豊臣秀吉の頃まで続く畿内時代の例外と見られるのが、鎌倉時代であります。それまでずっと畿内が政治の中心でしたが、別に坂東にも政治の一つの中心ができました。

天皇や貴族のいる畿内に対して、坂東はもともと畿内からの独立性の強い地域でありました。しかしながらそれが畿内に対立する重要な政治的地域として、はっきり登場してきたのは鎌倉時代からであります。

源頼朝が兵を挙げると、それを討つために平氏の大军が下ってきて、富士川の合戦となりました。この合戦に勝った頼朝は、平氏を追って都に攻め上ろうとしましたが、配下の武士達は、それよりも坂東を平定するのが先決だと諫め、頼朝はその意見に従って鎌倉に引き返し、その結果、坂東に幕府が作られたのであります。先程関ヶ原の合戦の後の家康や秀忠の選択が第三回目だと言いましたが、第一回目の東西の選択はこのときに行われたのです。

頼朝には二つの道がありました。上洛した場合、それまでの平氏と同様に、朝廷に奉仕する一武将として、既存の朝廷を補強する役割を果たしたことでしよう。頼朝はもう一つの、坂東に独立した政権を建てるといふ途を選んだのですが、それは彼の本意というよりも、坂東の武士達の意向に従ったものなのでした。

いま独立の政権と申しましたが、鎌倉幕府は完全に畿内の朝廷から独立しきっていたわけでは
ありません。それ以後、鎌倉幕府は東国を支配し続けましたが、それは勝手に支配したのではな
く、朝廷から東国支配権を認められたことによるものでした。

また幕府は日本の軍事警察を担当していますが、それも勝手にやっているのではなく、朝廷か
らその権限を認められた上のことです。要するに鎌倉幕府は朝廷のもとで東国支配権と軍
事警察権を認められた政権だったのです。

頼朝のような幕府のリーダー、武家の棟梁は軍事貴族と見るべきでしょう。すなわち一種の貴
族なのです。日本の貴族政治の特色は世襲制であって、天皇は世襲、摂政・関白も世襲でありま
す。貴族の諸家の家職・家業も世襲されます。和歌専門の貴族、学問専門の貴族、蹴鞠専門の貴
族等々の家々があるのですから、軍事専門の貴族の家があってもよいのでありまして、清和源氏
とか桓武平氏とかは、そういう軍事専門貴族なのであります。

頼朝は東国出身の地方武士などではありません。彼が伊豆に下ったのは、平治の乱に敗れて流
されたからであり、その延長で鎌倉に居座っただけであって、彼は京都生まれの軍事貴族です。
もし流されたりしなければ、彼はずっと京都にいて、清盛とあまり変わらない生活を送ったこと
でしょう。

坂東、東国という点に視点を置いて、頼朝がやった事業の意味を考えてみましょう。頼朝以前、

平安後期の東国は、乱れに乱れていました。「平家物語」には、東国武士と西国武士の気質を比較した有名な一節があります。

「東国の武士は、親が討たれ子が討たれても屍を乗り越えて戦う。ところが西国の武士は、親が討たれたら供養をし、忌が明けてから押し寄せ、子が討たれたら嘆き悲しんで、攻めて行かない。兵糧米がなくなったら田を作り、刈り取めてから攻め寄せ、夏は暑いから、冬は寒いからといって合戦をきらう。東国武士はこんなだらしなしいことはない」というのです。

西国武士と比べて、東国武士が勇敢だというのですが、別の見方もできるのです。西国では供養だとか、農業だとかの、日常的な秩序が存在しているのです。これに対して、死を何とも思わず、家常茶飯と化している東国は、やはり異常な、無秩序の世界ではないかと思えます。

平安後期には、このような無秩序の東国に朝廷の支配は及ばなくなっていました。頼朝はこういう状態にあった東国を統一し、畿内の朝廷に引渡し、朝廷の下での東国という体制を復活させ、その朝廷から東国支配を委ねられたのです。だから鎌倉幕府が出来た結果、東国の独立性が増したのではなく、むしろそれまでであった独立性が失われたのです。

富士川の合戦後、頼朝の上洛に反対した坂東の武士達の中には、頼朝が朝廷中心の考え方をすることに不満を抱き、強硬に反対したため、殺された人もいました。

東国や武士を重視する立場は、伝統的には日本の学界の主流ではなかったかと思えます。そ

いう立場に立てば、鎌倉幕府の成立は日本の歴史の大きなエポックだということになります。おそらく皆さんの大半がそう考えておられると思います。私も東国や武士が重要でないというのではありませんが、より広く、全日本的な視野を持つことが大切だと考え、私は鎌倉幕府の成立よりも、百年ほど前、平安後期に院政が生まれた頃こそが、歴史のエポックだと見ています。

どうしてかというと、平安後期に、天皇に代ってその父親が政治をする院政がはじまり、それは鎌倉幕府が出来て以後も続いている。その下で武家の棟梁が、部下の武士を率いて日本の軍事警察を担当するという、そういう体制は、幕府が生まれる前から成立していたし、幕府が出来てからも変らなかつた。このように院政という政治形態と、院政のもとの武士の役割とは、鎌倉幕府成立の前後を通じて変わっていない。そうだとすると、鎌倉幕府の成立にはさほど大きな意義はないということになります。

それではなぜ鎌倉幕府の成立が大きなエポックであると考えられてきたのでしょうか。私はこれには江戸幕府の立場が影響していると思います。江戸幕府は自身を鎌倉幕府の後継者として位置づけ、鎌倉時代から江戸時代までを一貫した武家政治として把える考え方が生まれました。しかし中世と近世との間に介在する断層の大きさはすでに申した通りであります。どちらも武家政治だといっても、鎌倉時代の武士と江戸時代の武士とは一向に似ていません。一言で言えば、前者は地主であり、後者はサラリーマンです。中世と近世とを一括して武家政治とするのは無理

なのです。

それはさておき、中世・近世を一括して武家政治と捉える場合、江戸幕府の正当性を論証するには、武家政治、すなわち鎌倉幕府成立の正当性を主張する必要があります。そこで生まれたのが武家政治に対する積極的な評価と、公家政治に対する否定的な評価であります。

公家は怠け者で、恋愛三昧に耽って政治を顧みず、世の中が乱れてきたから、質実剛健で逞ましい新鮮な武士が登場したという見方です。事実以上に公家が悪く言われ、それに代って武士が登場したことが肯定的に捉えられました。

鎌倉幕府の成立を重視するため、同じ武士でも平氏と源氏、ないし鎌倉幕府との違いが強調されました。「驕る平家は久しからず」などと言われ、平家は武士の出身であるのに、武士たちを裏切って貴族化し、贅沢をしたから滅んだなどといわれました。それは質実剛健を強調する道徳主義でありました。一体、粗野や野蠻がそれほどすばらしいのでしょうか。清盛も頼朝もいずれも軍事貴族であって、単なる地方武士ではなく、その点両者に違いはありません。清盛と同様に頼朝だって娘を天皇の后にしようとしたのです。もつとも清盛は成功し、頼朝は失敗しましたが、源頼朝に始まり徳川慶喜に至る武家政治を倒して天皇親政の国家をつくったのが明治維新だということ、鎌倉幕府から江戸幕府までが一貫して武家政治だったとする、前の時代の見方は、明治以後にも受け継がれました。

こういう見方は、後にはさらに階級闘争史観によって補強され、伝統的な支配者である貴族を倒して、新興の武士が登場して来たのは、歴史の大きな進歩だとされました。江戸時代以来の幕藩制的な武家政治観とマルキシズムという全然異質のものが習合して、主流学説となったのです。

私もある時期まではそう考えていました。私の考え方が変わったのは二十年程以前、昭和四十六年（一九七二）頃からであります。京都市による『京都の歴史』の編纂にあたり、鎌倉時代の政治史の部分の執筆を依頼され、ここで京都の視点で鎌倉時代史を見ることになりました。最初は従来 of 日本史が当然天皇のいる京都を中心に書かれていたものと思っていました。最初は誤解であり、鎌倉時代史は鎌倉中心に書かれていたのです。ここにもやはり武家中心史観の影響が見られます。しかし京都中心に歴史を見るということは、先に申しましたように、偏狭な京都ナシヨナリズムを意味するものではありません。まさしく鎌倉時代は京都中心に見ることによって、正しい姿がわかるのであり、今迄の鎌倉中心の鎌倉時代史は、その点欠けるところがあったのです。

ここで鎌倉時代をとりあげた端緒は、秀吉にまで至る畿内時代の中の唯一の例外としてでありました。しかし、実は例外といえるかどうか疑問であります。鎌倉時代というのは、政権の所在地による時代区分の一つです。京都に都があったから平安時代、鎌倉に政治の中心があったから鎌倉時代、また京都に戻ったから室町時代というわけですが、私は鎌倉時代にも京都に政治の中

心があったと考えているのです。幕府の東国支配権や軍事警察権が、朝廷に認められた結果だということからもそれは明らかです。だから鎌倉時代も畿内時代の例外ではないのです。

ところが従来の見方はそうではなかった。今迄の鎌倉時代史がどういうものであったかを皆様にお示しするために、誰でもよく知っているといるという理由で、中学の教科書に出てくる人物を挙げてみました。源頼朝、頼家、実朝という三代、そのつぎが北条時政、頼朝の妻の政子、「御成敗式目」を作った泰時、時頼、蒙古が攻めて来た時の執権時宗、これだけがあがっております、京都側の人物は後鳥羽上皇、一部の書物に後白河法皇が出ているだけです。

これは仏教史などは別として政治上の人物だけをとり上げたのですが、これでは鎌倉時代史ではなく、鎌倉幕府史、源氏と北条氏の歴史に過ぎません。京都側では後鳥羽上皇だけが出ていますが、上皇は幕府を倒そうとして失敗し、隠岐に流された人です。時代の進展に逆行して敗れた仇役としてのみ京都側が登場しているのであり、やはり武家中心史観、東国中心史観です。

ところが私の考えでは、日本全体を支配しているのは朝廷で、そのもとで鎌倉幕府は軍事警察を担当しているに過ぎません。だから鎌倉幕府史でなく、鎌倉時代史を考えなければなりません。朝廷と幕府という二つの権力があって、その関係が重要なのですから、朝廷と幕府を含めたトータルな日本の歴史を描き出さなくてはならないのです。さしあたり後白河法皇と後鳥羽上

皇だけが出て、そこから醍醐天皇までとんでしまふのではなく、西園寺公経とか九条道家とか、恐らくどの教科書にも出てこないような京都側の中心人物を登場させる必要があると思います。

公経は承久の乱の際には後鳥羽上皇に敵対して幕府に好意をもち、幕府の支持を得て乱後の京都の政界を牛耳った人物、道家は摂関家の人で、公経の女婿であり、実朝の死後、息子を鎌倉に將軍として下し、また天皇の外戚として権勢を振った人物ですが、皆さんに具体的なイメージを描いていただくため、彼らに関係深い文化財の面から説明しておこうと思います。

まず西園寺公経ですが、近代に活躍した西園寺公望はその子孫であります。西園寺家は幕府と親しく、鎌倉時代の後半には大いに栄え、藤原一門の老家である摂関家を凌ぐ勢を示しました。公経は西園寺というお寺を建てましたが、後に足利義満はその地を譲り受けて北山邸を建て、その中に金閣を造営しました。金閣寺内の安民沢という池は、鎌倉時代、西園寺家の時代の名残りであります。

一方、九条道家は東福寺を創建しました。東福寺とは東大寺プラス興福寺という意味であります。息子を將軍にし、娘を天皇の后とし、親子で摂関の地位を独占し、絶大な権力を誇った道家の驕りが、東大寺と興福寺を合わせたような大寺院を造らせたのであります。現存の山門は室町時代に造られたもので、道家が造った山門は焼けましたが、それでもこの山門を見ると、禅宗のお寺であるにもかかわらず、完全な禅宗様式ではなく、どこか東大寺の南大門にも似た感じがす

るのであります。天竺様とか大仏様と言われている建築様式が加わっています。禪寺でありながら東大寺を真似て造られたのであります。

またこの寺の仏殿には大仏が安置されていません。今の仏殿は昭和の再建ですが、本尊の大仏は焼けたまま、とうとう復興されておりません。東大寺という、聖武天皇が造った、古代天皇制のシンボルである寺が規範となって、その後に見れた権力者は東大寺を真似た寺院を造り、やはり聖武天皇にならって大仏を造ったのです。道家の時代の建物はいま何も残っていませんが東福寺は鎌倉時代の京都の政治の記念碑であります。

四 分裂から統一へ

鎌倉時代でもやはり京都が政治の中心であったという私の考え方は、鎌倉時代も後期になると、具合の悪い点が出てきます。鎌倉幕府の成立が時代の変り目ではなく、平安時代の後期に時代はすでに変わっており、それが鎌倉時代まで継続しているのだと申しましたが、鎌倉時代の中頃からは、新しい時代の流れが起こってくるからです。だから平安時代の後期から鎌倉時代の中頃までが一つの時代だということになるのですが、それは実は日本の歴史の中でもっとも権力が分裂した時代でありました。

即ち鎌倉幕府と朝廷との分裂だけでなく、朝廷でも幕府でも誰が権力を握っているのかわから

ない状態です。朝廷では天皇は形だけで、天皇の父親が上皇として院政を行っている。また鎌倉幕府では將軍があまり力がなくて執権が実権を握っている。ところが実は執権ではなく、北条氏本家の得宗こそが実力者である。それから貴族や寺社の所有している莊園ですが、これは不輸・不入といって、国家が税を取ったり、警察権を行使するのを拒否する権限を持ち、独自の徴税権・警察権を握っている。また武士もそれぞれ固有の支配権を持っている。いわば国内には沢山の小国家があるという状況であり、このように当時の日本の国家は、多元的に分裂していたのであります。

多元的分裂と言えば、戦国時代を思い出されるかもしれませんが、戦国時代は確かに群雄割拠ではあるけれども、それぞれの大名の領国の中ではかなり集権化が進められていて、次の全国的統一へのステップになっています。むしろ平安後期から鎌倉中期までこそが、多元的分裂の時代であります。やがてそれを一元化しようという動きが起こってまいります。それを最初に着手したのは鎌倉幕府側で、北条時頼の頃からその傾向が始まるのです。

幕府が日本を統一するためには朝廷が問題ですから、朝廷の政治に対する干渉を強めてまいります。この頃から天皇を選定する権力が実質的に鎌倉幕府に移ります。国家が分裂していても、対外的に日本を代表していたのは朝廷ですが、幕府は朝廷が持ち続けてきた外交権をも奪います。北条時宗が朝廷の許しもなく蒙古の外交使節の首を斬ったのはその一例です。これを昔は勇まし

い話だとし、時宗は偉い人だと言いましたが、国際慣例から見れば暴挙です。そしてこれは幕府が朝廷から外交権を奪ったことになります。日蓮などは北条氏のことを「国王」と呼んでいます。が、北条氏は国王と呼ばれるような一面を持つに至ったのです。

鎌倉ではこの頃から禅寺がたくさん建てられます。中国の文化は九州の大宰府に伝えられますが、大宰府は当時幕府側が支配していたため、中国文化は九州から京都を経由せず、鎌倉へ直接入って来ます。だから中国文化の輸入という点では京都より鎌倉の方が早いのです。

東福寺は禅寺だと申しましたが、東大寺や興福寺を模したことからも明らかのように、純粹の禅寺ではありませんでした。中国そのままの純粹な禅は、京都には鎌倉経由で入って来るのです。だから禅宗に関する限り、鎌倉が日本の中心だったのです。

天皇選定権や外交権まで掌握した幕府は、日本の統一的支配者になろうとしたのですが、政治だけでなく、文化の面でも京都の真似ではなく、京都を凌がなければなりません。ところが文化は付け焼刃ではできませんから、京都にないものとして、中国から禅宗様文化を輸入しました。幕府が禅を採り入れたといっても、単にその教義だけの問題ではありません。禅に伴って絵画も建築も、儒学も、生活様式までも入ってくる。禅宗にともなうこれらの文化のすべてを、幕府は受け容れたのです。

鎌倉大仏が造られたのも、この頃であります。先程も申しましたが、聖武天皇以来、権力を握

った人は、大仏を造りたくなるらしい。聖武天皇にならい、九条道家が造り、そして京都の道家に負けじと、幕府が、恐らくは時頼あたりが、鎌倉に大仏を造った。これはやはり幕府の統治者意識のあらわれです。

「徒然草」に面白いことが書いてあるのです。

「吾妻人の言った事は信用できる。京都の人は口先の返事だけがよくて誠意がない」と言う人がいた。ところがそれに対して、関東の武士の出で、京都に上って僧侶になっている人が、「別に都人の心が悪いのではない。都人は心が柔和で、人の頼みをきっぱりと断れず、はっきりものを言えずに気弱く引受けてしまう。偽る気持はないのだが、貧乏で何事も思うにまかせない人が多いので、思い通りにならないことが多いのだ。ところが吾妻人は一本気だから、出来ないことは最初からノーと言ってそれで済んでしまう。生活が裕福で、引受けたことは実行できるから、人に信頼されるのだ」と言った。

東国の人と京都の人との気質の違いを論じていますが、当たっているか、いないかは御判断にお任せします。私が気になったのは、都の人が「乏しく叶はぬ」、吾妻人が「にぎはひ豊か」とある点です。いささか京都中華意識に毒されている私は、東国は武力では強いかもしれないが、文化や生産力は畿内の方が上だと思っていたので、これを読んでガツンとやられた思いでした。鎌倉時代の終りになると、東国の方が豊かだということです。鎌倉後期から鎌倉幕府側の政治・文

化の向上はめざましく、鎌倉中心の世界が出来つつあったといえましょう。鎌倉後期の幕府の施策がもしそのまま成功していたならば、この時点で坂東時代が出現したかも知れませんが、そうならず、結局幕府は滅亡してしまつたのです。

権力の多元的分裂を一元化しようとする動きはまず鎌倉幕府側から出てきました。逆にそれを京都側からやろうとしたのが後醍醐天皇で、それをもう一度逆転して一元化を達成したのが室町幕府です。この点はイデオロギーぬきで考えて頂きたいものです。北条と足利はつながるが、後醍醐天皇は別のものだ。後醍醐方は忠臣だけれど、北条・足利方は逆臣だ。或は北条・足利は進歩的だが、後醍醐側は保守反動だといふうにいわないことが大切です。実質はさほど違わぬものを、イデオロギーにこだわって忠臣、逆臣、進歩、反動などのレッテルで色わけすべきではありません。北条・後醍醐・足利の流れは、分裂を統一しようとする一貫した動きであつて、武家と公家との両方の側からの動きが競合した結果、武家側からの統一が勝つたということなのです。地域という観点からすれば、畿内時代の中に坂東時代的傾向があらわれ、畿内と坂東との間で綱引きが行われた末、前者が勝つたといつてもよいでしょう。そしてこのような動きの中で、私は京都という観点から、とくに足利尊氏に注目したいと思ひます。

足利氏の出身地は坂東の上野、栃木県であります。ところが尊氏が鎌倉幕府に謀反の兵を挙げたのが、丹波の亀岡市の篠村八幡であります。また尊氏はやはり丹波の綾部市で生まれたらしく、

京都府出身だということになる。これはお母さんの家で、お母さんは上杉氏であった。上杉氏はもと下級貴族で、宗尊親王が將軍となつて京都から鎌倉に下つたときについていったのですが、その上杉氏出身の女性が尊氏の母なのです。上野と丹波に拠点をおき、京都とのつながりのある尊氏は、当時の政治的課題であつた、東と西との統一者にふさわしい条件を具えていたといえます。

先程話した東せんか西せんかの選択の第二番目ですが、尊氏は識者たちに「幕府を鎌倉・京都のどちらに置くか」について諮問をしているのです。すると識者たちは、「政治の善悪が大切であつて、場所などどちらでも構わない。しかし、もし人々が幕府を京都に移したいと言うならば、その意見も尊重しなければならぬ」という玉虫色の答申をしています。

尊氏は初めのうちは鎌倉に執着を持っていました。鎌倉を落とした功労者は新田義貞で、そのとき尊氏は京都に上つていたのですが、抜け目なく四歳の息子を義貞に同道させ、鎌倉攻めに加つたという実績だけを残しています。それから更に鎌倉に足利の勢力を補強し、とうとう鎌倉攻めの本当の殊勲者である義貞を追い出したのです。尊氏は鎌倉幕府を再興し、継承しようと考え、鎌倉だけは京都の後醍醐天皇にも指一本ふれさせないようにしており、ついに鎌倉を拠点として天皇に叛いたのですが、天皇方と戦っているうちに、むしろ京都に幕府を置いて朝廷を吸収していこうという方向に路線が変わつたのだと思います。それは鎌倉後期以来の坂東と畿内との

綱引きに一つの決着をつけたものともいえましよう。このとき尊氏がもし鎌倉に固執したとしたら、鎌倉時代的な東西の分裂がさらに続いたことでしょう。尊氏が京都に移って来たことによつて、分裂から統一への動きが促進されたこととなります。

そしてもし尊氏が京都に幕府を置かなかつたら、もう京都には老化した朝廷と貴族しか残らない。鎌倉後期の鎌倉の繁栄は著しいのですから、そこに幕府まで行つたならば、鎌倉こそ日本の中心となつたでしょう。それから数百年にわたり、京都が栄え続けた基礎は、このとき尊氏が京都を拠点にしたことにあると思われ、京都に対する尊氏の貢献は大きかったです。

尊氏の決断によつて、かつては京都と鎌倉に分かれた朝廷と幕府は、同じ京都で併存することになり、京都に御所が二つあるという結果になりました。一つは内裏、一つは幕府であります。

公家と武家の二つの権力の統合をなし遂げたのは三代將軍義満の時代でありました。義満は武家の最高の官職である征夷大將軍に加えて、公家の最高の官職である太政大臣となり、さらに彼が建てた相国寺七重塔の供養のときなど、法皇の御幸に準じた形で参列しました。室町殿は子の義持に譲つて北山邸に移りましたが、北山邸はまるで法皇の御所でありました。ですから彼が対外的に日本国王を称したのも当然のことです。彼が亡くなったときには、朝廷から太上天皇の称号を与えるという話が起りましたが、さすがに義持はそれを辞退しました。しかし、現在残っている義満の位牌には「鹿苑院太上法皇」と書かれています。かれは武家の側

から王朝の吸収を達成したということになります。

そして義満の場合にも巨大なものへの憧れが見られます。かつて平安時代の中頃、白河天皇、自分の思うようにならないのは賀茂川の水と双六の賽と山法師だけだと言った、あの専制的な権力者ですが、その天皇が法勝寺を建て、高さ八二メートルの八角九重の塔を造りました。今の岡崎公園の動物園の辺りですが、巨大であるとともに、八角九重という奇抜なデザインの塔でしたが、そこに大仏を安置したのです。

義満はこれに競って相国寺に高さ百十メートルの七重の塔を造りました。いまこの辺りに塔の段という地名があるのも、その名残りであります。その供養の際の義満の振舞は、先にお話した通りです。

こうして義満の頃には、武家側による王朝の吸収が行われましたが、その頃、平安京の荒廃は進んで参ります。

元来平安京は大切に扱われてきました。平安時代の後期に保元の乱が起きました。慈円は「愚管抄」の中で、この乱を「武者の世」の始まり、乱世の始まりだといって歎いているのですが、どうして乱世の始まりかという点、慈円は面白い理由を挙げています。

今迄から乱逆・合戦はあったが、それは将門の乱にしても、前九年の役にしても、刀伊の入寇にしても、都を遠く離れた関東、陸奥、鎮西などの出来事であった。保元の乱は都で起こされた

最初の内乱であり、だから保元の乱は乱世の始まりだと、慈田は言っているのです。

慈田は前九年の役のことを「十二年ノタタカイ」と呼んでいます。合戦が十二年続いたって、都を遠く離れた坂東や陸奥での出来事ならば、どうでもよいのです。こういう意識だからこそ、先ほどいったように、この頃坂東の独立も進むのです。

前九年の役が十二年続いたのに対して、保元の乱は何年続いたのかと言いますと、わずか四時間です。それだけ都に対する慈田の愛着が強いということになります。その愛着の根源は、京都が天皇政治と貴族政治の拠点だからであり、たとえ四時間にせよ、そこで合戦が行われたことは、たえがたい苦痛だったのです。

京都をめぐる次の問題としては、平清盛によるいわゆる福原遷都があります。その前年に清盛は後白河法皇を幽閉して、その院政を止めさせ、政権を握ったのですが、たとえそうしても旧体制の巢窟である京都にいる限り、いつ法皇を中心に貴族や寺院が結集して清盛の足もとをおびやかすかも知れません。だから清盛が新しく作った軍事政権を維持するためには、どうしても京都を離れる必要があったのです。ところがそれ故にまた、遷都に対する貴族や寺院の反発も強く、「平家物語」には遷都について「平家の悪行に於いては極まりぬ」と書いているのです。清盛は反対派の人々を流したり、殺したり、法皇を押込めたりしていますが、それらの悪行のなかでも、遷都は悪行の極みだということです。

他の様々の悪行にくらべ、都を遷したぐらいでなぜ悪行の極みかといえ、それも天皇政治、貴族政治の拠点である都に対する愛着が背景になっており、だからこそ清盛はその都を放棄しようとしたのであり、また貴族側にとっては都の放棄は、許しがたい悪行だったので。貴族側の強い反対で、清盛もわずか半年で京都に還らざるを得なくなり、逆に鎌倉幕府が一五〇年間続いたのも、京都を離れたからこそであります。

京都は貴族だけでなしに、武士によっても大切に扱われ、ここでの合戦はつとめて回避されてきました。源平の合戦の時には、源氏の兵が入って来る前に平家は都落ちしてしまいました。承久の乱でも鎌倉勢が入洛する前に後鳥羽上皇方は降伏しました。このように京都は戦場にならなかったのです。これは京都が焼けなかったのではなく、天皇制の権威があったが故に、焼かないように努力したのです。

ところがそういう意味で大きな変化があったのは、後醍醐天皇に叛いた足利尊氏が、鎌倉から都に攻めのぼった際のことです。天皇は比叡山に逃れましたが、その後で皇居であった富小路殿が、尊氏に呼応して攻め上った四国・西国勢によって焼かれてしまいます。「梅松論」という書物ではこれを平家の都落ちに比較していますが、適当ではありません。平家は自分の邸に火を放って逃げたのですが、富小路殿を焼いたのは後醍醐天皇ではなく、足利方だったからです。しかも足利勢が火を放つ前に、無頼の徒が富小路殿をさんざん荒らしまわってあったといえます。明

らかに天皇と結びついた都の権威は、失われているのです。

その後、尊氏は敗れて九州に逃れ、また攻めのぼって来るのですが、そのとき、尊氏は東寺を本拠とし、比叡山に逃れた後醍醐方との間で、四か月にわたって京都で市街戦が行われます。もう従来 của タブーも何もなく、京都はすっかり戦場になってしまします。

その決定版が応仁の乱でありまして、足軽という雑兵が出て来て、放火・略奪を事とし、洛外 of 社寺から公家の邸まで焼き払います。従来 of 武士のモラルなど無視したような、一条兼良という貴族の言葉を借りれば「超過したる（ずばぬけた）悪党」である足軽が跳梁します。しかも敵が立て籠っているから火をつけるといふのでなく、放火・略奪自体が目的なのです。この乱が十年間続いたことで、京都の町は荒廃してしまふのです。

この乱で平安京以来の京都はすっかり変わり、むしろこれを契機として、新しい京都が町衆たちによって復興されるのであります。そうすると尊氏は、京都に対しては功罪相半ばすることになるのかも知れません。

五 豊臣秀吉と京都

尊氏に次いで京都と関係の深い政治家は豊臣秀吉であります。

武家としての門閥を持たない秀吉は、天皇の権威に頼ろうとし、天皇の都である京都を重視し

ました。

秀吉が京都で実施した都市政策として寺院街を作ったことが挙げられます。当時の京都の東の端に寺町、北の端に寺の内をつくり、それらの地区に寺を集めました。また現在は一部しか残っていませんが、市街を囲んで、お土居という土塁を造りました。京都の町を防衛するとともに、賀茂川の洪水から守るためでもありました。また短冊型の町割をこしらえました。平安京以来、一町（一二〇メートル）四方の正方形の町割が行われていたのですが、その真中に南北に道をつけて短冊型の町をこしらえたのです。後で申しますが聚楽第、方広寺の建立など、秀吉が京都で行ったことは実に多く、秀吉のころには、京都はめざましく発展しました。

しかし秀吉といえ、京都よりも大坂だと見られています。秀吉にとって、京都と大坂ではどちらが重要だったのでしょうか。

秀吉は賤ヶ岳の合戦で柴田勝家を破り、信長の後継者の地位を確立しますと、やがて大坂城を築きはじめます。大坂は水陸交通の要地ですし、付近の住吉、平野、堺などには豪商がいました。秀吉は堺商人らを大坂に移し、大坂の繁栄を図りました。ところが秀吉が大坂に居たのは僅か四年間であり、やがて秀吉は京都に移り、聚楽第に入ります。秀吉はここに天皇を迎え、その前で大名達に対する忠誠を誓わせ、天皇を利用して自分の権威を高めたのです。聚楽第は関白の公邸でしたから、秀吉は関白を養子の秀次に譲ると、聚楽第をも譲りました。ところがのちに

秀次との関係が悪化すると、秀吉は秀次を自刃させる一方、あれだけ贅を尽した聚楽第を完全に取り壊してしまったのです。話は前後しますが、聚楽第を秀次に譲った秀吉は、やがて諸大名に朝鮮出陣を命じ、自身も九州の名護屋に赴いたりする一方、伏見城を築きはじめ、晩年はここに住みました。

秀吉は聚楽第に次いで、東大寺にならって、京都に大仏を造りはじめます。権力者は大仏に執心を抱くものらしく、聖武天皇、九条道家、北条時頼のあとを追って、秀吉も大仏を造ったのです。そして大仏建立の釘・かすがい（鏝）にするのだと称して刀狩を実施し、百姓達から武器を取上げ、武士・農民の身分を分離、固定させました。やがて大仏殿は出来上りましたが、地震で大仏が壊れたのを、子の秀頼が家康にすすめられて再興します。このときに大坂の陣のきっかけになった「国家安康」の鐘銘をめぐる騒ぎがおこるのです。

この方広寺は大変なスケールの寺院です。平安京から現在に至るまで、一条から九条までの通りは殆ど変わっていないのに、五条辺だけが平安京と今とは違うのです。これは伏見と方広寺を結ぶために、もとの六条坊門小路（今の五条通）に五条大橋を架けたことによるもので、もとの五条通は今の松原通です。

また付近には後白河上皇のために平清盛が造営した三十三間堂もありますが、それが方広寺の境内に取り込まれます。そして由緒を誇る三十三間堂も方広寺の一つのお堂、千手観音を安置し

ているから千手堂とされたのです。

秀吉は東山三十六峰の一つ、阿弥陀ヶ峰に遺骸を葬るよう遺言し、その没後、山頂には豊国廟が造られ、麓には社殿が営まれ、方広寺の鎮守とされました。

このように考えると、お土居を造り、聚楽第を造り、阿弥陀ヶ峰に葬るよう遺言した秀吉は、大坂よりも、伝統的な天皇制の都である京都に憧れていたといえましょう。

然るに大阪人が秀吉を「太閤さん」として尊敬しているのに比べて、京都人は秀吉に冷淡で、別に何とも思っていないように見えます。王城の地の住人は、地方から侵入する武人を見なれており、秀吉ごときは歯牙にもかけていないのでしょうか。文化的に洗練されているが故の冷たさは、京都の特色なのかもしれません。

或はこういう見方もできるでしょう。坂東時代である今日、畿内である大阪や京都は、関東に對するアンチテーゼなのですが、今や反関東意識を代表するのは京都よりも大阪になっているような気がします。しかしそれは近代の京都と大阪との歩みがそうさせたのであって、古くからのものではないのです。

関ヶ原合戦の四年後、家康が征夷大將軍となった翌年、まだ大坂では豊臣氏が生き残っていた慶長九年（一六〇四）、秀吉の七回忌にあたり、豊国社の祭礼が京都の全域にわたって行われました。これは家康と大坂方の合意で行われたもので、双方の思惑が秘められていました。大坂方

としては太閤人気を盛り返そうという意図があり、家康の方では評判のよい秀吉を盛り立てることによって懐の深いところを見せるつもりがあったのでしょうか。しかしその家康の意図は見事に崩れてしまったのです。

その頃、京都の人々の間では、秀吉への追慕というよりも、日々にしめつけが厳しくなる江戸幕府の京都支配への反感が強まっていました。その不満をバネに、踊は異常なたかまりを示し、伏見城にいた家康は一步も城から外に出ることができず、徳川方の武将の中には、あわてて伏見城を固める者まで出る有様で、一部の踊りは伏見城にも押しかけました。それは畿内時代のフィナーレを飾る熱狂的なパレードでありました。

最後にもう一度、西か東かを選択する機会がありました。いうまでもなく明治の初めです。当初は京都の天皇が將軍の江戸を政治的、軍事的に占領するというのが、明治天皇が京都から江戸に赴いたことの意義なのでしょうが、そして都を江戸に移したとは公言せず、あいまいさを残したままですが、都の座は東京に移りました。

もう時間がなくなりました。くり返しますが、今までの歴史には、やはり関東中心、武家中心の一種の偏向があります。そして江戸時代に作られた幕藩制的な歴史観は、明治以後も厳しいチェックを蒙らぬまま継承されている面があります。また明治維新は貧弱な革新を誇大宣伝で粉飾して来たような面もあります。そのチェックを十分にやり直して、あるべき日本歴史、ないし日

本を考えることが必要ではなからうかと思えます。一介の歴史家に過ぎない私には、京都がどうあるべきか、日本がどうあるべきかを云々する力量はありません。しかし敢えて言わせて頂くならば、京都はそのチェックを果たすにふさわしい立場にあるのではないかと思えます。

どうも御清聴ありがとうございました。

(京都大学教養部教授)